

# 37 PM D患者の情緒的側面について Rorschach test による情緒的側面の研究

国立徳島療養所

早田 正 則      川 合 恒 雄  
中 西      誠

PM D患者の多くは成長期を病棟という狭い生活空間で、しかも病状の進行を自覚し、人の介助を受け、同病の友の死を体験しながら青年期を迎えてきている。このような生長過程は彼らの人格形成、なかでも情緒的側面に多大な影響を及ぼしていると思われる。そこで彼らの情緒側面の特性を探り、生活指導の一助とする。

本研究の場合、直接質問するという調査方法よりも、内在的反応が得られる投影法が適当と思われ、P-F・study にひきつづき、Rorschach test を実施した。対象は当所入所中のPM D患者37名で、そのうち34名がデュシャンヌ型、在所年数は5年以上のものが24名、5年未満が13名となっている。年齢は9歳～25歳、上田式8段階ステージでは5度以上が31名となっている。

検査は片口式に準拠して実施した。その結果について片口基準等をもとに顕著な特徴が認められたものにつき、以下6項目に要約し報告する。

1. 第1に10カードの総反応数では20未満のものが26名というように少ない。
2. 平均初発反応時間については、健康成人が30秒以下なのに比べ、29名が遅く、なかでも23名の者が1分を過ぎるなど著しく、4分39秒にまで及んでいるものも見られる。また、平均初発反応時間の遅いものは総反応数も少ない。
3. 反応領域については総反応数が少ないこともあるが、全体反応のしめる割合(W%)において、健康成人の標準を上回る者が18名というように多い。また、Dd %においても23名が標準を上回っており、一般には非常に出現頻度の低い特殊部分反応の出現が多いことがわかる。
4. 反応決定因では決定因の幅を示すDR値が少ない。しかもその内訳は総カラー反応( $\Sigma C$ )が0のものが23名、人間反応そのものが少ないこともあるが人間連動反応(M)が0のものが17名というように、 $\Sigma C$ およびMに出現数0の者が高率にでてくることなど、形態反応が優位に出現している。しかもF+ %は健康成人の標準に比べやや低い。
5. 反応内容ではその幅を示すCR値が少ない。また、その内訳は動物反応(A)中心であり、なかでも、他人に対する関心や感受性を反映すると考えられる人間反応(H)で出現率0のものが10名みられるなど少ない。
6. 平凡反応については、総反応数が少ないこともあるが、出現数がやや少ない。

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

PMD 患者の多くは成長期を病棟という狭い生活空間で、しかも病状の進行を自覚し、人の介助を受け、同病の友の死を体験しながら青年期を迎えている。このような生長過程は彼らの人格形成、なかでも情緒的側面に多大な影響を及ぼしていると思われる。そこで彼らの情緒側面の特性を探り、生活指導の一助とする。

本研究の場合、直接質問するという調査方法よりも、内在的反応が得られる投影法が適当と思われ、P-F・study にひきつづき、Rorschach test を実施した。対象は当所入所中の PMD 患者 37 名で、そのうち 34 名がデュシャンヌ型、在所年数は 5 年以上のものが 24 名、5 年未満が 13 名となっている。年齢は 9 歳～25 歳、上田式 8 段階ステージでは 5 度以上が 31 名となっている。